

三田メディアセンター所蔵 レファレンス資料利用度調査(2023～2024)の報告

さとう ゆりえ
佐藤友里恵

(三田メディアセンター主任)

1 はじめに

三田メディアセンターでは、2017～2018年に図書館新館1階（以下「1階」とする）に配置されたレファレンス資料の利用度調査を行い、この調査結果や出版年等を元を選別して、多くの資料を新館地下4階書庫（以下「地下4階」とする）に移動させた。その調査から約5年が経過した2023年4月にレファレンス担当内で「そろそろまた利用度調査をしてはどうか」という声が上がったことを受けて、2023～2024年に再び調査を行った。本稿ではこの2回目となる調査について報告する。基本的には前回同様の方法によるが、ここでは調査結果について前回と比較することはしない。

2 調査の実施内容

ICタグやRFIDタグ等がついておらず、手に取った資料は自分で書架に戻すルールとなっている図書館で、貸出対象としていない冊子資料がどの程度手に取って利用されているのかを把握することは簡単ではない。書架の乱れ具合や、資料の傷み具合によってある程度推し測ることができるが、具体的な数字には結びつかない。では、他にどのような方法があるだろうか。通常業務を行いながら長期の調査を実施するには、図書館員だけでは無理な話で、図書館利用者（以下「利用者」とする）の協力が欠かせないと考えた。

前回は利用者也巻き込んだ人海戦術で調査を行ったが、今回もそれに倣うことにした。当時作成した掲示物等も適宜アレンジして再活用することで、準備にかかる時間と手間を多少は省略することができた。

(1) 対象資料

三田メディアセンターレファレンス担当の管轄となるレファレンス資料は現在約51,300冊、そのうち7割ほどは外部書庫である山中資料センターに保管されている。残る3割、約15,700冊が三田キャンパ

スにあり、そのほとんどが1階と地下4階に配置されている。基本的な資料、比較的よく利用される資料、新しい資料は1階に置かれているため、利用者がアプローチしやすい環境となっている。利用頻度が少ないであろう古い資料や旧版資料は、地下4階へまとめている。

前回の調査以降、地下4階が配置場所に追加されたため2つのフロアで調査を行うことにした。レファレンス資料は1階と地下4階以外にも図書館旧館等にわずかに配置されているのだが、作業の手間等を考慮して省略した。対象となる資料は、1階約8,800冊（DVD-ROM等の非図書資料を除く）、地下4階約6,300冊、あわせて約15,100冊である。

(2) 調査期間

今回は2023年10月10日から2024年10月10日まで実施した。調査の提案が上がった時は業務繁忙期と重なっていたこともあり、着手したのは9月に入ってからだった。開始日は、秋学期の授業が始まり入館者数が増えてくる頃を見計らって10月10日とした。一方、終了時期については、当初は約1年後の9月末としていたが、正確に1年間のデータを収集すべきだと考え直したこと、初日は準備等に時間をとられて実質1日もなかったため事実上の開始日は11日と考えてよいこと、の2点の理由から最終的に2024年10月10日までに変更した。

(3) 調査方法

調査は、①利用者に利用した資料を書架に戻さず所定の場所に置いてもらう、②それらをレファレンス担当4名で記録用紙に書き込む、③資料を書架へ戻す、④記録した内容をExcelファイルに転記してデータを保存する、という流れである。資料を置いてもらうための返却場所は、ブックトラック、低書架の上、書架の空いている棚を活用して、利用後にあまり移動せずに置くことができるよう多めに設置した。

記録する作業は、まずは前日の夕方以降に返却場所に置かれた分を始業時に手分けして行い、それ以外の時間は置かれている（あるいは溜まっている）ことに気づいたスタッフが記録をとった。利用が少ない地下4階は、初めの頃は1日1回の作業としていたが、様子が見えてきてからは数日に1回程度の頻度となっていた。

利用後そのまま書架に戻されてしまったり、授業の課題等でよく使われる資料は記録をとらない間に何度も利用されてしまったりするケースもあった。そのため、やむを得ないことではあるが、すべての利用を漏れなく確認できてはいない。ただ、様子を見ていた限りでは、かなりのデータを得ることができたかと思われる。

記録用紙に記入する項目は、日付、請求記号、バーコードラベルの番号のみとし、ファイルに入力する際に、タイトル、巻、出版者、出版年、配置場所の情報を追加した。手書き・手入力にもかかわらず記録ミスがほとんど出なかったことは、その後の作業において大変ありがたかった。

(4) 広報

利用者をお願いするのは「資料を使ったら返却場所へ置く」ことだけだが、まずは調査を実施していることを意識してもらわなければならない。そのため、とにかく視界に入るように、「調査実施中」のポスターに加え、各書架の棚板やブックトラックにも所定の返却場所へ誘導する掲示を出した。さらに今回の調査では「ここが返却場所である」ことを示す紙を貼りつけ、同時に三角柱を置いて立体的にも目につくように工夫を施している。(図1～3)



図1 書架とブックトラック



図2 書架の書棚



図3 返却場所

また最初は目立ちやすい「赤」を基本色としたが、時間の経過に伴って見慣れてしまい意識されにくくなるため、途中で2回の張り替え作業を行った。赤の次は緑、その次は濃いピンクを基調として、「何か変わった」感じを演出することで改めて意識してもらうようにした。

最初に掲示した枚数を以下に挙げてみる。1階、地下4階を合わせた数である。

- ・「利用度調査実施中」ポスター27枚
- ・書架棚板用掲示866枚
- ・「返却場所」37枚
- ・三角柱（1階低書架のみ）13本（枚）
- ・調査対象書架の案内（地下4階のみ）4枚

合計947枚で、2・3回目は多少変動するが全期間の延べ数はこの3倍となる。初日は作業のコツをつかむまでに時間もかかり、すべて貼り終えたのは午後まだいぶまわってからであった。2回目以降は一斉に変える必要はなく何日かけて空いた時間に順に張り替え作業を行った。

調査終了時は、最終日の翌朝に前日利用された分を記録、すべての掲示物と返却用ブックトラックを撤去し、「調査終了」の掲示を出した。予想したほどの混乱もなく、以前のように書架に戻されるようになるまで時間がかからなかったため、1か月ほどで掲示を剥がして完全終了とした。

3 調査結果

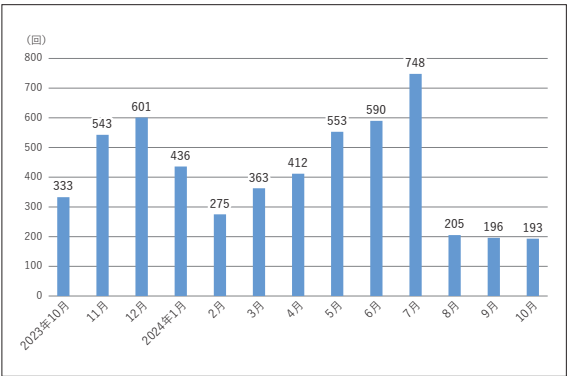
日々記録したデータは毎月はじめに前月のバックアップをとりつつ統計をまとめ、最終的に総合値での統計を出した。調査期間366日中、開館日は293日、利用回数は5,448回、利用資料は1,102タイトルであった。この結果について5つの切り口で分析した。

(1) 月別統計

表1のとおり、最も利用された月は7月の748回、次いで12月の601回であった。逆に少なかったのは9月の196回、8月の205回となっている。想定していたように、授業期間か期間外かによる部分は大きいとみられる。授業やセミナーとの関わりの詳細について具体的な確認はできないが、毎年同じような傾向が見られるのではないかと推測される。

ちなみに、もっとも利用回数が多かった日は2月のとある一日、131回であった。100回を超えること自体が稀である中で突出した回数となった。そして、まったく資料が利用されなかった日は、わずか5日のみであった。

表1 月別統計



(2) 配置場所別統計

1階の資料は合計5,131回、地下4階は317回であった。やはりよく利用される資料は1階に集中している。言い換えれば、多くの利用者は1階に置かれた資料を使うということになるだろうか。地下4

階の中で利用が目立ったのは『国会便覧』である。古い巻は元々山中資料センターにあったのだが、取り寄せ回数が多いため三田キャンパスに戻して地下4階配置とした。置かれた環境にも負けずよく使われる資料となっている。

(3) 和洋別統計

調査対象の和書と洋書の蔵書数はほぼ同じだが、利用回数については和書は4,088回、洋書は1,360回であり、和書3：洋書1の比率となった。タイトル数で見ると和書861タイトル、洋書241タイトルで、回数の比率と大きく乖離することはない。

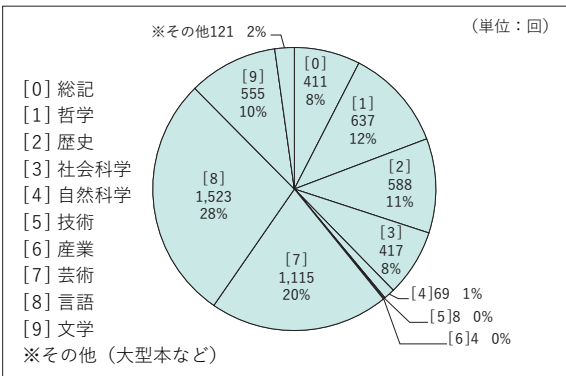
(4) NDC分類別統計

NDC分類ごとの利用も第2次区分（綱目）まで統計を出してみた。

まず第1次区分（類目）では、表2に示すとおり「[8] 言語」が1,523回と最多で、全体の3割ほどを占める結果となった。次いで「[7] 芸術」が1,115回、「[1] 哲学」が637回である。月別統計で見ても、ほとんどの月でこれらの分野がトップ3に入っている。

第2次区分で見た結果は、表には出していないが、「[70] 芸術・美術」926回、「[81] 日本語」465回、「[13] 西洋哲学」399回の順となった。第1区分の分野と少々順番の入れ替えがあったものの、この3つの分類で3割を占めており、特定の資料に偏りが出ていることがわかった。

表2 NDC分類別統計



(5) タイトル別統計

調査を経てレファレンス担当にはすっかり顔なじみとなった資料のうち、100回を超えた6タイトルを紹介する。参考までに請求記号の分類番号も（ ）内に付しておく。複数巻からなる資料は合計値をとっているため、1冊ものとの不公平感は否めない

が、敢えて1タイトルとして見ていただきたい。

『新潮世界美術辞典』(703) 220回

『国会便覧』(314.1) 193回

『オックスフォード西洋美術事典』(703) 180回

『スクリブナー思想史大事典』(130.3) 171回

『New dictionary of the history of ideas』(130) 165回

『大漢和辞典』(813.2) 112回

美術の2タイトルはそれぞれ複本があり、いずれも利用が多いのだが、複本の方がよく使われている。書架では複本が右側に並ぶため手に取りやすいのだろう。学生に聞いてみると、やはり授業の課題で使っているとのことであった。集中する時期には次々と学生が手に取る様子をレファレンスカウンターから眺めていた。厚みと重さのある図書がこれだけ利用されれば当然傷みも進んでおり、今回、利用がやや落ち着いたところで再製本や買い替えを行った。

思想史の2タイトルは原書と翻訳書の関係に非常にセットで利用されている印象がある。これらの資料も、授業の中で紹介して学生が利用していることを教員から伺うことができた。

また、特定のタイトルが特別に利用されているわけではないが、毎年のように授業において人物について調べる課題が出ると280～281の伝記の書架が乱れ始め、しばらくその状態が続く。その様子を見て、今年もまた人物調査の時期がやってきたことを知るのである。

4 調査から気づいたこと

電子化が進み入館者数が減っている中、セミナー等の機会に教員から「学生が図書館に行かない」「インターネット上の情報しか見ない」という嘆きの声をいただくことが多い。その一方で、授業で出される課題をこなすために図書館を利用せざるを得ない学生が、来館して実際に様々な資料にあたって情報を集める一面も確認できている。学生が手軽に入手できるものを好む傾向にあるのは実感としてあり、図書館の資料を使ってもらうようにするには、当然ながら図書館側からの働きかけは必須である。そして、教員との協力体制がとれば、かなり有効であろうという思いも抱くようになった。

また、文・経済・法・商の学部を有する三田キャンパスにありながら社会科学分野の資料が思ったほど使われていないという発見もあった。表2の[3]

が社会科学だが、この中の内訳を見てもどれが多い・少ないという差はほとんどなく、全体の7.7%の割合に留まっている。この分野は、近年レファレンス資料の冊子の受け入れが少ないことや、データベースや電子資料が充実していること、また、研究内容によっては新しい情報が重要で冊子資料をあまり必要としないことが背景にあるのかもしれない。レファレンス担当としてもデータベース等の利用を薦めているのだが、一方で冊子も使ってほしいという願いがあり、セミナーの際にはお薦めの資料を紹介している。これが利用につながってくれば喜びもひとしおである。

5 おわりに

1年間にわたる調査は大変ではあったが、レファレンス資料に対する親しみや理解が深まり、また、通常のシェルフリーディングでは得られないデータを確保できたことで、実施した意義は大きいと考える。人事異動による欠員対応や業務繁忙期により着手できていなかったが、この後は配置場所や分野ごとの分析をする予定である。

2回の調査の結果は、日々の受入れ資料の選定においても参考にしているが、そろそろレファレンス資料全体のコレクション構築の見直しをする時期かとも思われるので、そこで活用するための準備を進めておきたい。

最後に、ご協力くださった利用者の方々、および調査を見守ってくださった三田メディアセンタースタッフに、改めて感謝申し上げる次第である。